vol.18　ドリアンスケールの使い方について　～その 4～

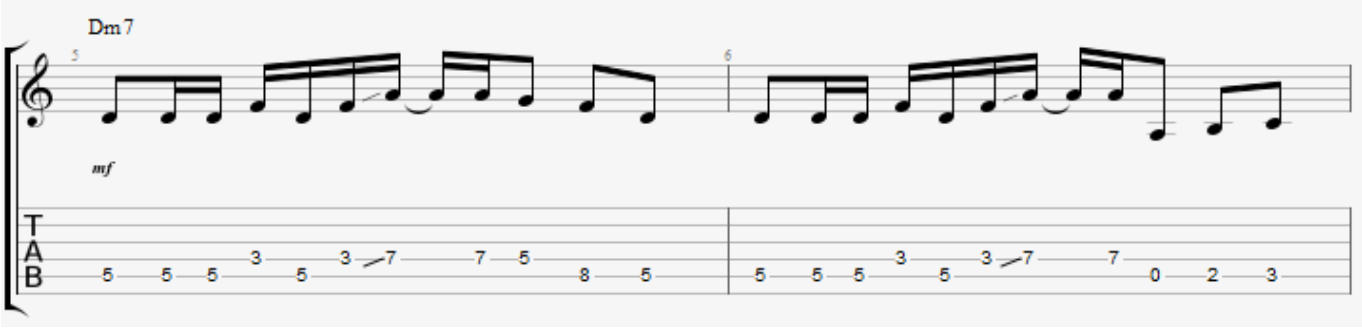
では、vol.18、始めていきましょう。

今回でドリアンは最後になります。リディアンの時と同じ様に、実践的な観点から見ていきましょう。

まず最初は、「バッキングでドリアン・モードを作り出す」と言う事をやってみます。

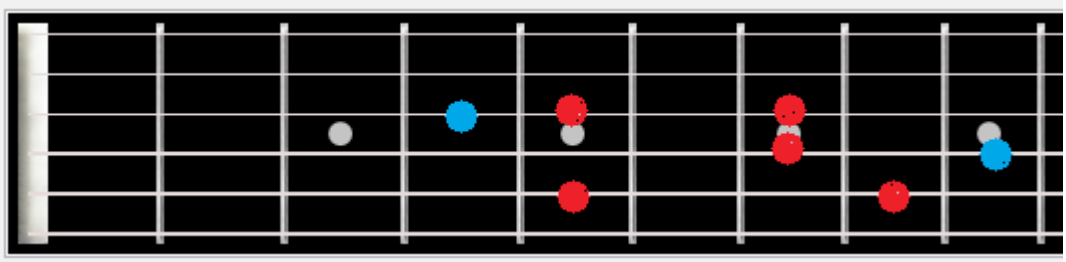
これまでは主にコード進行で見てきましたが、vol.15 の譜例で出した様に、実は単音でもモードを表現する事が可能です。

譜例 1、D ドリアン、単音リフ(BPM100～120 位)



要するに、Xm7 の構成音である、root、m3rd、P5th、m7th 辺りを鳴らしている所に、M6th(13th)を加えれば、それはドリアン的である、と言う事ですね。

※Dm7 アルペジオ+M6th(青丸が代表的な M6th の位置)

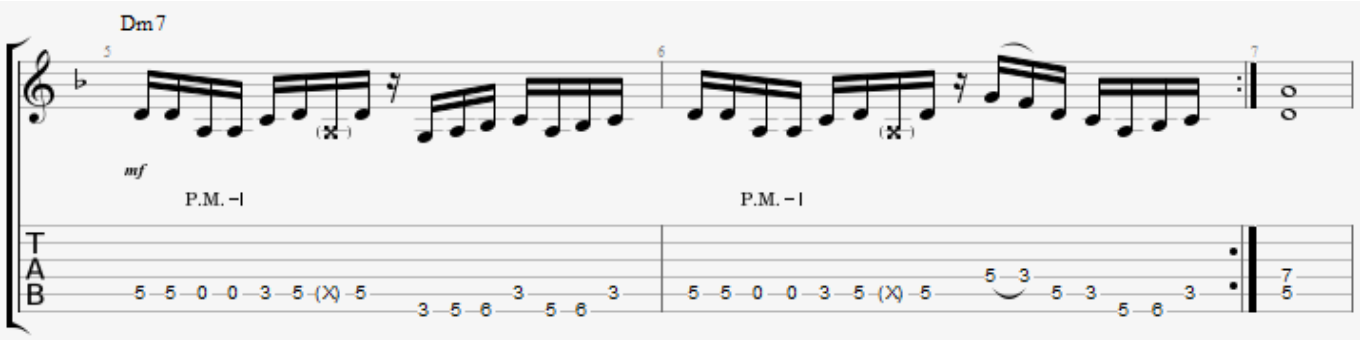


譜例 1 とこの図では、使っているフレットが必ずしも一致していませんが、音程的には Dm7+M6th の状態になっています。

この M6th が m6th になるとエオリアン(ナチュラルマイナー)的な状態になるので、響きが変わるわけですね。

譜例 2、D エオリアン(ナチュラルマイナー)、単音リフ(BPM100～120 位)

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved



当たり前の話ですが、譜例 1 をバッキングとして、その上で D エオリアンでメロディー弾くと音が外れ、譜例 2 上で D ドリアンを弾くと音が外れます。

たった一音の違いでも、全体の響きに影響がある事を確認しておきましょう。

次に、代表的なコード進行ですが、D ドリアンのダイアトニックコードの使用感は以下の様になっていましたね。

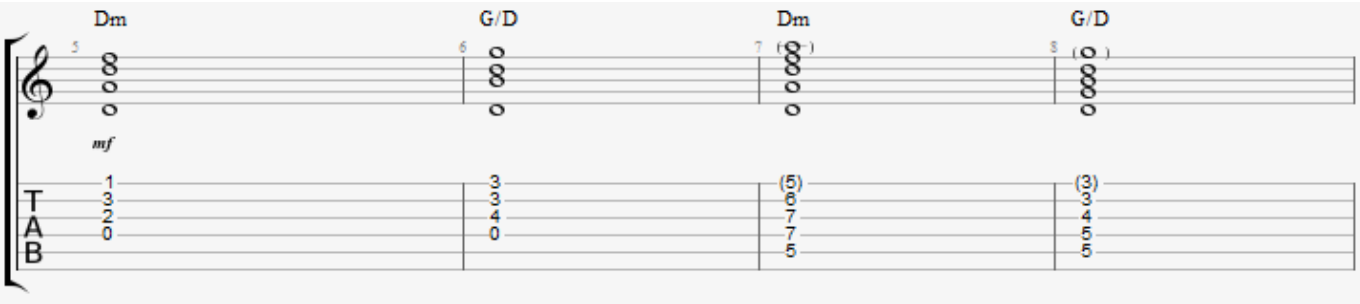
1、Dm(tonic)、Dm7(tonic)
2、Em(IIm)、Em7(IIm7)
3、G(IV)
4、F(♭III)、FM7(♭IIIM7)、Am(V7)、Am7(Vm7)、C(♭VII)
5、G7(IV7)、CM7(♭VIIM7)

実際の所、この内の 3 と 4 は、そこまで使用感に順位を付ける必要は無いかもしれません。重要なのは、ドリアン以外の響きを出さないように進行を作る事ですので。

さて、前のテキストでは、Dm7 と Em7 を使ったシンプルな形の進行を紹介したので、今回は他の進行を見ていきましょうか。

まずは、リディアンの時にも出てきた「トニックペダル」を使った進行です。

譜例 3



ヴォイシングは、結果、目的のコードを形成できていれば何でもいいのですが、比較的使いやすいものをそれぞれ 2 種類ほど載せました。

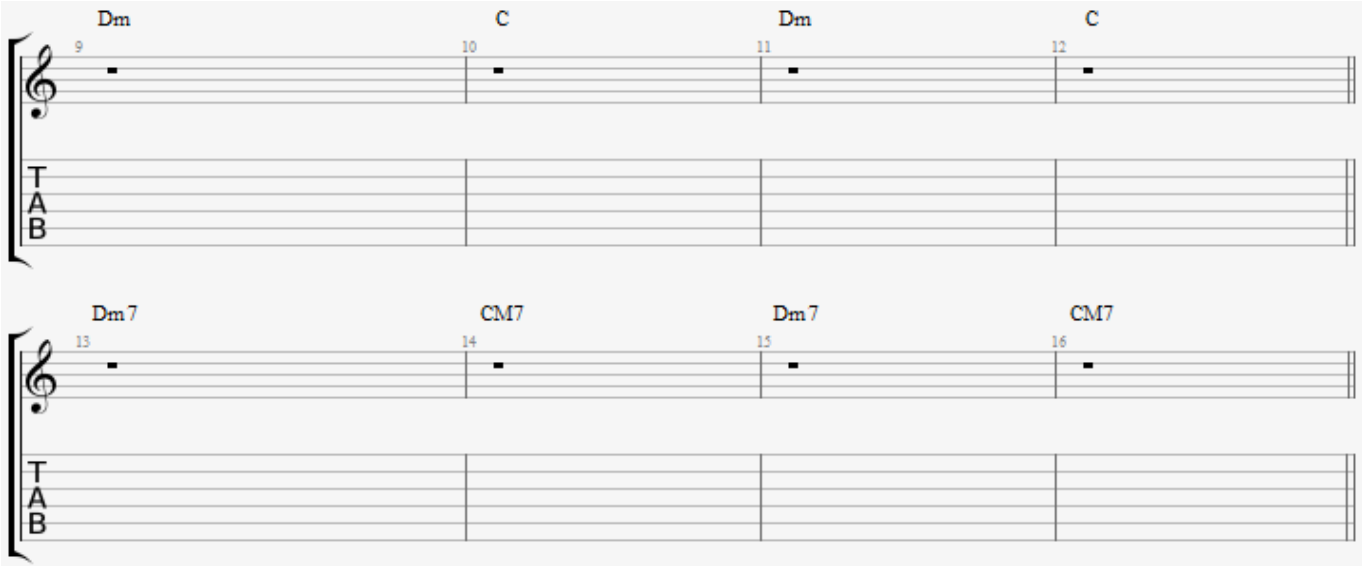
Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

G/D は G コードの 5th ルートの形ですね。

2 小節間で D ドリアンのトニックである D 音が続くので、ドリアンモードに響きが寄っていく、と言う事です。

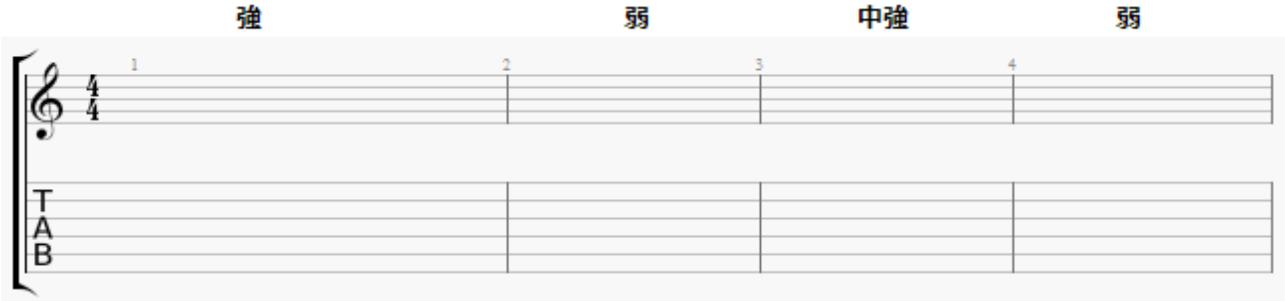
次はトニックコードを中心に、隣り合ったコードへ進行するパターンを見てみましょう。

譜例 4



これは上下で続き物の譜例では無く、上段をトライアド、下段を 4 和音のパターンとして作ってあります。

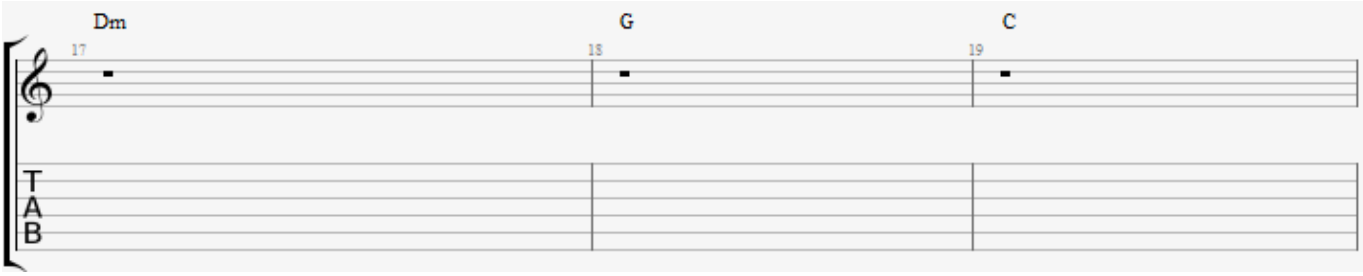
一見、C(CM7)コードがトニックの様に聴こえそうですが、小節全体の強弱関係によって、Dm がトニックの様に聴こえますね。



試しに、C キーのケーデンスである、Ⅱ－Ⅴ－Ⅰでの C コードの響きと比べてみるとわかります。

譜例 5

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

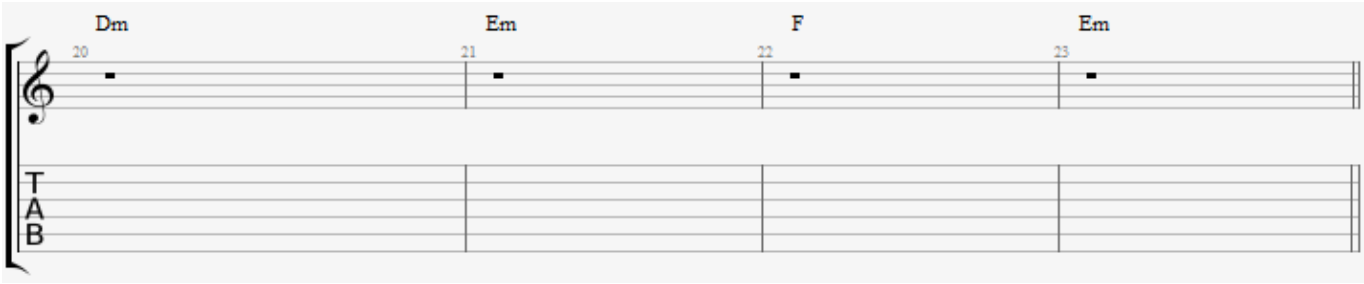


譜例 4 と 5 では、C コード自体は同じものですが、各コードの位置関係や前後関係等で響きの感じ方が変わっていますね。

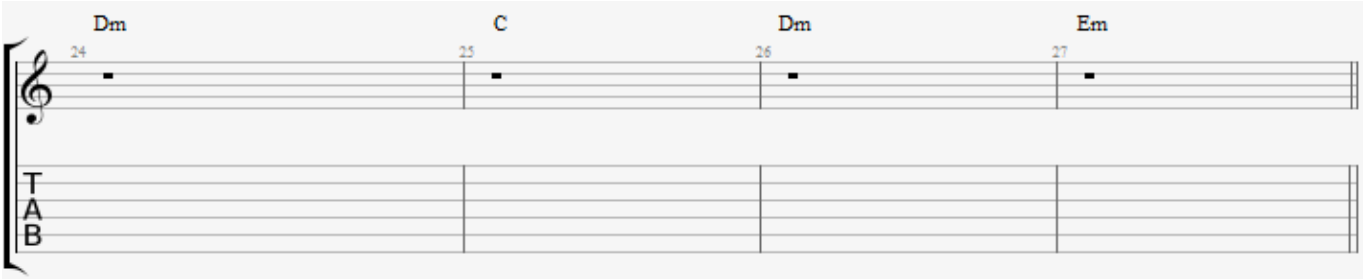
この辺りの違いが分かるようになると、狙った響きを出す為の進行が自力で作れる様になります。

次に、隣り合ったコードで言えば、Dm の隣には Em もあるので、そちらを使う進行も見てみましょう。

譜例 6



譜例 7



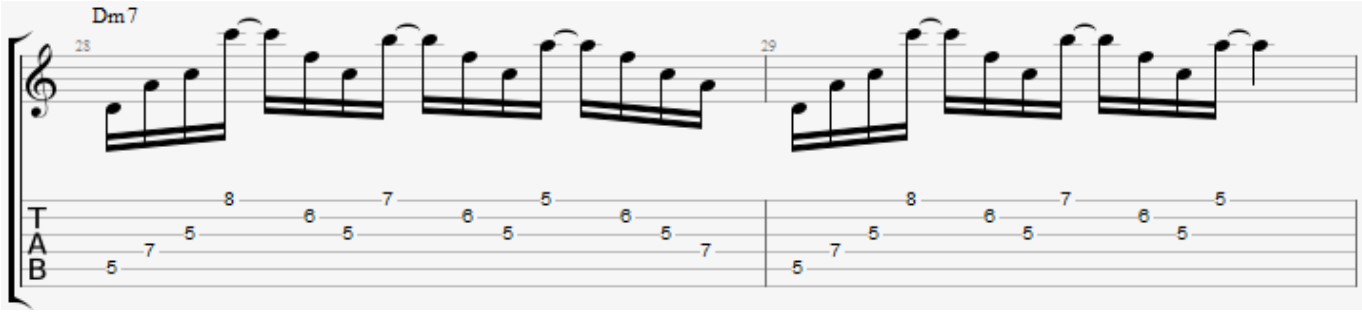
譜例 6、7 共にトライアドで表記していますが、4 和音を使う事も可能です。

他にも、大元のアイディアとしては譜例 1 に近いですが、コード進行ではなく、フレーズでドリアンの響きを作ることも可能です。

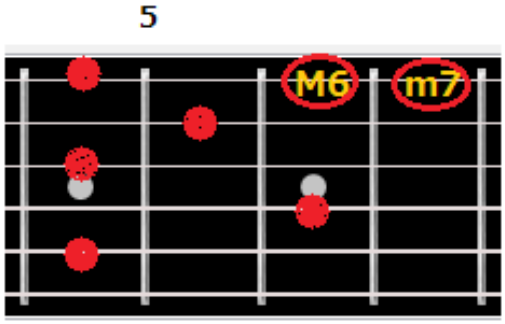
以下は、Dm7 のコードアルペジオに M6th(13th)を入れたパターンです。

譜例 8(BPM100～120)

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved



図、譜例 8 の音使い



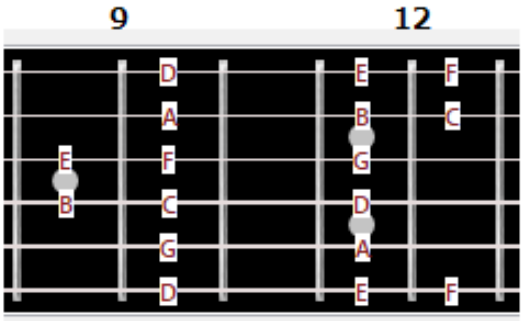
この様に、特性音を上手く加えて特定のモードを表現する方法もあるので憶えておきましょう。

それでは、代表的な進行もある程度出したところで、リードプレイの方に行ってみましょうか。

こちらも、大元のアイディアとしてはリディアンの時とほぼ同じです。

まずは、以前も紹介しましたが、使いやすくわかりやすいドリアンのポジションとしてはここが挙げられますね。

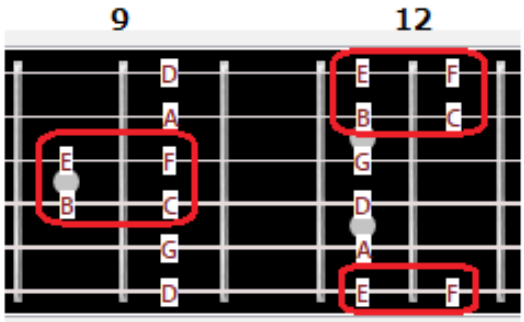
図、D ドリアンスケール重要ポジション



このポジションは、ドリアンの特性音である 6 度の場所と、スケール構造の重要なポイントである「半音で接する部分」が非常に見やすくなっています。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

図、D ドリアンスケール重要ポジション、6 弦ルート



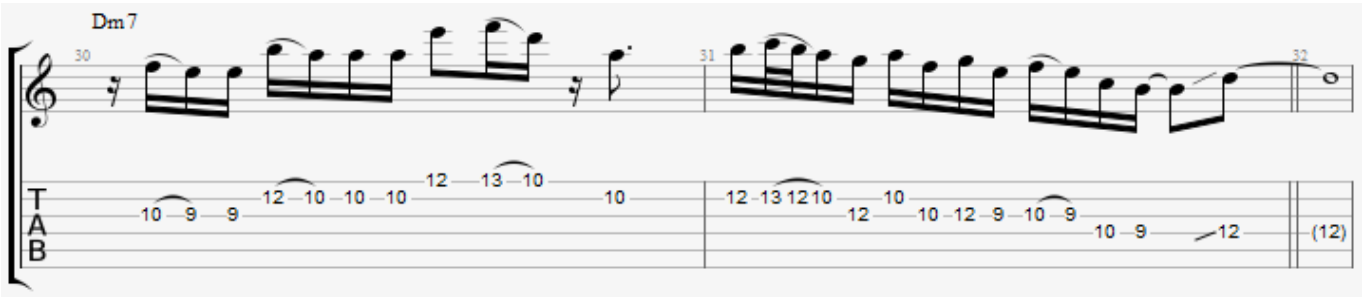
ここはリディアンの時にも同じような事を話しましたね。

ドリアンの場合、B&C 音の部分が M6th&m7th、E&F 音の部分が M2nd&m3rd となります。

この内、M2nd はテンションとしては 9th にあたるので、非常においしい音が把握しやすいポジションです。

例えばこのポジションを使って、譜例 8 のバッキングの上でソロを弾くとしたらこんな感じです。

譜例 9

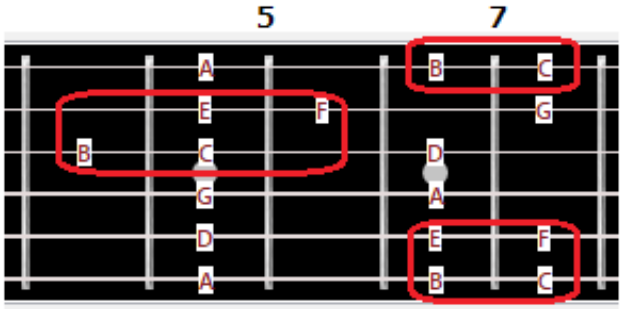


上記ポジション内で、特性音周辺を意識して弾いたフレーズですね。

ここは D マイナーペンタ+M2nd&M6th と見る事も出来るので、ロック的な奏法もやりやすいポジションです。

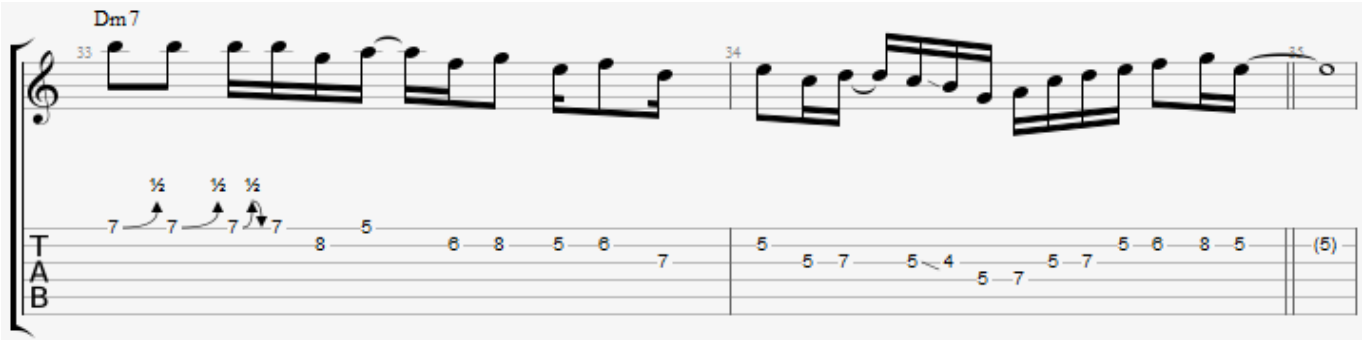
次に、同じ様な事を 5 弦ルートでもやってみましょう。ポジションは以下の様になります。

図、D ドリアンスケール重要ポジション、5 弦ルート



Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

譜例 10



譜例 9、10 共に、指定のポジションを出来るだけ使う事を意識しているので、細か目のフレーズになっていますが、実際はロングトーン系の演奏でも構いません。

次にリディアンの時にもやった、「ドリアンの特性音を含むペンタを当てる」と言う手法を見ていきましょう。

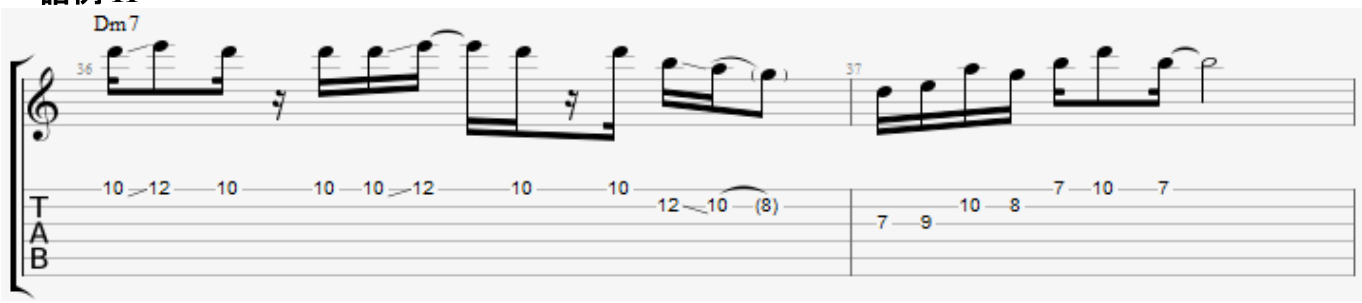
D ドリアンの場合は、特性音が B 音なので、この音を含むペンタとしては E マイナー(or G メジャー)ペンタが挙げられます。

トニックである D 音に対しての E マイナーペンタの構成音は、

E(M2nd)、G(P4th)、A(P5th)、B(M6th)、D(tonic)

となっており、Xm7 的な響きを作る m3rd や m7th が出てこないので、少しフワフワしたような印象になります。

譜例 11

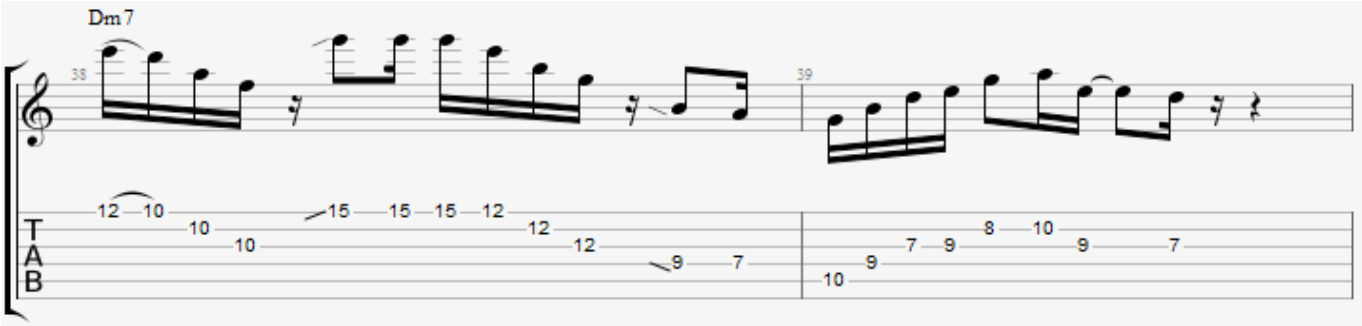


このペンタのアイディアを使う場合は、普段ペンタで使っている指使いから離れる事を意識すると、モード奏法的な響きが出しやすくなるでしょう。

ここからの派生として、E マイナーペンタが使えると言う事は、Em(Em7)のアルペジオ等を使っても特性音(B 音)が含まれる事になります。

譜例 12

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved



1 小節 1 拍目だけは Dm7+9th のアルペジオですが、その後は Em7 的に弾いています。

さて、長々とやってきましたがドリアンについては以上になります。

何度もお話ししていますが、モード奏法は、大元のロジックはほぼ共通なので、特定のモードで学んだ事を他のモードでも生かすことが可能です。

以前の、リディアンでのアイディアや視点をドリアンでも使う事が出来るので、それらを生かして演奏を考えてみましょう。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved